



日中は、まだ暑さを感じますが、朝夕の過ごしやすさから確実に秋が近づいてきている感じがします。子供たちの服装にもちらほらと長袖の上着を着ている様子が見られました。衣服の調節における声掛けをよろしくお願いいたします。

いよいよ10月です。今年度も半分を過ぎ、折り返しになります。これからも安定しない天候が出てくると思いますが、子供たちの体調管理や自然災害には十分気を付けて過ごしたいものです。

秋を感じる…「中秋の名月」

旧暦の8月15日の夜に出る月は「中秋の名月（ちゅうしゅうのめいげつ）」と呼ばれ、古来、この日にはお月見が行われてきました。

現在の暦では年ごとに日付が異なり、今年は「10月6日」に当たります。この日は満月かと思いきや、次の日（7日）が満月になります。わずかな欠けはありますが、ほぼ満月の月を見ることができそうです。

月は1年を通して空にあり、満ち欠けを繰り返していますが、秋のこの時期は空気が澄んでいて、ひときわきれいに見えるともいわれます。身体だけでなく、目と心で「秋」を感じてみるのもよさそうですね。



前期の通知表を持ち帰ります！

本校は、昨年度から通知表2期制となり、本日、前期の通知表を持ち帰らせています。

通知表は、お子様の学校での様子をお知らせする「学習や生活の記録」であり、「成長した軌跡」です。そして、家庭と学校とが協力して、よりよく育てていくためのものです。御家庭で前期の学校生活について話し合い、学習面・生活面のよさを認め、ほめる材料として、また後期の目標づくりの基にさせていただきたいと考えております。

子供たちがこれから生きる社会は「予測困難な社会」と言われます。そうした社会の中で自己実現を図るためには、自己理解は不可欠です。今の自分の状況を客観的に把握し、次の一歩をどう踏み出すのか、自分づくりの構想につなげていく力が求められます。

学期末と異なり、長期休業中の生活面指導等がありません。通知表をもとに、担任が一人一人の子供たちと学習の取組やその成果等についてしっかりと話をする時間を確保できます。こうした時間を確保することで、子供たちにとっても、自分の学習の取組がどのような成果として通知表に表れているのか、後期の学習に見通しはどうするのかを考える機会となります。今の自分を知ること、次の自分づくりにつながります。

○評価について

現在の評価は、各教科で設定した目標（規準）に達しているかをみる『目標に準拠した評価（絶対評価）』であり、他の子の評価（成績）に関係なく、その子の頑張った結果が反映されるものです（昔は、学級の中で上位〇%、中位〇%、下位〇%というように、学級の中の位置づけで決まる『相対評価』というものでした。）。

「よくできる」が何個で「できる」が何個あったという見方でなく、どの教科のどんな学習で力が発揮されたか、どんな部分をこれから頑張ればよいか等、お子様をほめたり、励ましたりするための材料としてください。

○評価項目について

数年前から『単元別』（「円の面積を求めることができる」「植物のつくりとはたらきについて理解している」等）ではなく、『観点別』の項目（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）になっています。項目の内容が一見分かりにくく感じられると思いますが、これは、学校教育は本来、単元ごとになっている教科書の内容を教えるのが目的ではなく、学習指導要領の内容を教科書を使って教えるのが目的だからです。



10月のテーマ「続ける」

昨日（9月30日）に、1日早い「10月の全校集会」を実施しました。

10月の学校生活における目標（テーマ）と生活目標について話しています。

校長講話では、10月のテーマが「続ける」であるということを以下のような話で伝えました。一人一人が目標をもって、それに向けての努力を積み重ねていく姿が増えていくことを願うばかりです。（講話の内容から抜粋）

今日は、陸上選手のお話をします。

9月13日から21日までの9日間に「世界陸上」が東京で開かれていました。世界中からたくさんの選手が集まり、それまでの努力の結果を競う大会です。この大会に、日本代表の選手として出場した村竹ラシッド選手、みなさん知っていますか？日本を代表してオリンピックや世界の大会に出ている、110メートルハードルの選手です。この前の「世界陸上」では、メダル獲得を目標にして、男子110メートルハードルに出場し、決勝まで進みましたが、5位という結果でした。

レースのあとのインタビューで、村竹選手は一番はじめにこう言いました。

「何が足りなかったんだろう」「何が間違っていたんだろう」。

そう言っているうちに涙が止まらなくなり、その場にうずくまってしまいました。

私は、きっと村竹選手は、この1年間、できること、思いつくことのすべてをやり尽くし、自分に厳しく、限界を越えて練習をし、努力を重ねてきたのだと、その映像を見て思いました。だからこそ、メダルに手が届かなかった悔しさが、あの涙になったのだと思います。

私は、村竹選手のように、自分にうそをつかずに努力を続けた人だけが見られる特別な世界があるのではないかと考えています。

村竹選手の走り、インタビューに答える姿を見て、みなさんに伝えたいこと。

それは——「地道に努力を続けたその先には、自分にしか味わえない、何にも代えがたい気持ちや世界がある」ということです。そして、「続けることは難しいですが、やり続けた後には、必ず大きなものを手に入れることができる」ということです。

「積み重ねる」これが「続ける」ということです。うまくいかなくても、どんなにつらくても続けていけば、その先には必ず何かがあります。決して大きな目標への努力でなくともいいのです。当たり前のことでも続けることも大切なのです。私もそうですが、ほとんどの人は「やろう」と決意し、「始める」ことはします。でも、「続ける」ことができないのです。「成功する人」と「そうでない人」の差は、「続けられるか、続けられないか」ということだけなのです。

一人一人が、自分の得意なこと、自分が決めた道に正面から向き合い、自分を信じて精いっぱい努力を続けていってほしいです。そして、まわりの人たちともしっかり協力して、最後まで「やり抜く」という経験を重ねていってほしいと思います。

最近の子供たちを見ていて、気になることがあります。

それは、「努力を積み重ねる力が弱くなってきているのではないか？」ということ。もちろん、すべての子供たちがそうとは言いません。しかし、学校での学びやスポーツ、習い事などを見ていると、「すぐに結果を求める」「苦労せずにできる方法を探す」子供たちが増えてきているように感じます。YouTubeを開けば、すぐに楽しい動画が流れてきます。調べものをするときも、インターネット検索すれば、知りたいことがすぐにわかります。「努力しなくても、欲しいものはすぐに手に入る」そんな環境に慣れてしまった子供たちは、「積み重ねることの大切さ」を実感する機会が減っているのかもしれない。

例えば、「練習しても、試合で活躍できるようにならないから面白くない」など、「頑張ったのに結果がすぐに出ない」ことが、子供たちにとって大きな壁になっているのではないのでしょうか。

でも、本当は「成果が出るまでに時間がかかるものこそ、大きな力になる」のです。また、「小さな努力の積み重ね」が、「自信」につながります。少しずつでも努力を続けることで、「自分はできる！」という感覚を持つことができるのです。

「継続は力なり」という言葉がありますが、これはまさに「積み重ねる力」の大切さを表している言葉だと思います。小さなことから積み重ねる経験を大切にしたいですね。

